

2014年9月21日O.A.

シリーズ「セクシュアル・マイノリティー」(1)

ダブル・マイノリティーの悩み

スタジオ出演:	桂木 祥子 (かつらぎ・さちこ) 【らぎ】	セクシュアル・マイノリティー当事者
	近藤 由香 (こんどう・ゆか) 【コジ】	(同)
	大河 りりい (たいが・りりい) 【りりい】	(同)
	英 尚枝 (はなぶさ・ひさえ)	NHKディレクター

はるな愛 : は〜い! バリアフリー・バラエティー「バリバラR」の時間です。

パーソナリティのはるな愛で〜す。よろしくピ〜す。「バリバラR」は、Eテレで放送している障害者情報バラエティー「バリバラ」のラジオバージョンです。

今週と来週と2回にわたりまして、セクシュアル・マイノリティーをテーマにお届けします。日本語にすると、性的少数者、私も性同一性障害なのでセクシュアル・マイノリティーになりますけども、今日はですね、3人の当事者の方におこしいただきました。早速ご紹介しましょう。

まず最初は、桂木祥子(かつらぎ・さちこ)さん、通称「らぎ」さんです。精神保健福祉士で、セクシュアル・マイノリティーの人たちの当事者活動や支援をしているNPO法人「QWRC(クオーク)」で、電話相談コーディネーターをしていらっしゃるんですよ。よろしくお願ひいたします。

らぎ : はい。よろしくお願ひします。らぎです。私のセクシュアリティはバイセクシュアルで、男女ともに好きになったりとかします。

はるな愛 : はい、続きましてですね、近藤由香(こんどう・ゆか)さんです。通称「コジ」さん。

同じく「QWRC(クオーク)」で、メンタル面に悩みがある人たちのグループの主宰をしていらっしゃるんですよ。近藤さんご自身も当事者でいらっしゃるということですよ。

コジ : えっと、私のセクシュアリティはレズビアンで、病気は統合失調症です。

はるな愛 : どれぐらい前から?

コジ : 診断名がついたのは10年ぐらい。レズビアンは、うーん・・・

らぎ : 30年近い?

コジ : 30年近いのかなぁ・・・(笑)

はるな愛 : もう、生まれてからずっと、ってということですよ。

そしてもうお一方です。大河りりいさん。エイズ予防のための活動をはじめ、セクシュアル・マイノリティーの人たちの支援をされています。「りりい」さんです。

りりい : よろしくお願ひします。りりいです。私はトランスジェンダーとして戸籍の性別をのりこえて、女性としての生活を望んでいます。

はるな愛 : ふーん、私と、だから一緒の枠ですよ?

りりい : はい、そうです(笑)。

はるな愛 : (笑) このね、粹もね、でもね、そんな粹はないんですよ。今、こうやって言うけれど。
みんなそれぞれ、この中で複雑に分かれているので・・・今日、わかるかしらね。
番組を担当した英 尚枝 (はなぶさ・ひさえ) ディレクター、よろしくお願いします。

英 D : よろしくをお願いします。

はるな愛 : ね、複雑なセクシュアルがほんとにあるんですね。

英 D : セクシュアル・マイノリティーについては2年前にこの番組でお伝えしましたけれども、人口の5%ほどいると言われていています。で、障害のある方たちの中にも、もちろん、セクシュアル・マイノリティーの方がいらっしゃって、障害ゆえの様々な悩みを抱えていらっしゃる方もいらっしゃる。ということで、今日は番組に寄せられたメールをご紹介しますながら、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。

はるな愛 : はい。東京におすまいの「レイ」さん。視覚障害の方です。

私は全盲で、女として生まれ、今はXジェンダーとして生活しています。女性というカテゴリーの中でも苦痛で、かといってまるっきり男性にもなれず、心の男女比は8対2というところでしょうか。これまでいくつかセクシュアル・マイノリティー当事者の自助グループに参加しましたが、自分が唯一の視覚障害者ということで、「どう接したらよいのか」と周りの人が戸惑っているのを空気として感じ、孤立感を感じました。
逆に、いわゆる視覚障害者の集まりのようなところでは、性別違和のことをカミングアウトできにくい空気を感じています。自分の生まれ持った「女性」という性別のレッテルを貼られ、その違和感は苦痛です。こんな孤立感だらけの私に何かよい情報がいただけたら感謝です。

ということですけどね。Xジェンダーというのはなんですか？

らぎ : Xジェンダーというのは、数学でいうXなんですけど、何が入るか分からない、というので、男から女じゃなくって、男からほかのもの、とか、中性とか、両方とか思っているときにつかうX。

はるな愛 : そっか。なんでも入るし、何が入るか自分でもわからない、Xジェンダー。へえ・・・

らぎ : で、Xジェンダーっていうのは、別に「迷い途中の人」ではなくって、ずっとXジェンダーという人もいはるので。

はるな愛 : へえ。こういう相談って多いですか？

らぎ : そうですね。多いですね。こういう障害とセクシュアリティ両方の課題があって、どうしたらいいかわからない、っていう相談もよくあります。どっちに行ってもなかなか片一方のことを言えないということもあるし、コミュニティが狭いから言いにくい、っていう・・・広まっちゃったりとかしたら、みんなが自分のセクシュアリティを知っている、みたいになっちゃうので。
あと、自分が何者かを知るときに、やっぱり人としゃべったりとか、本読んだりとか、いろんな情報をつかんでいかないと、自分が何者であるかってやっぱりわかりにくいじゃないですか。でもそれがたぶん、視覚障害がある人にとっては、健常者よりも情報をつかみにくかったり、人と自分のセクシュアリティの話をする機会が少ないので、っていうのはあると思います。

英 D : そういう意味のダブルのマイノリティーになってしまうということですよ。

マイノリティーのマイノリティーみたいな人たちがつながる方法って、何かありますか？

らぎ : 私も、視覚障害の人でXジェンダーの人にも会ったことがあるんですけど、たとえば、この人は東京ということで、東京だったら、障害をもってセクシュアル・マイノリティーである人たちの集まりとかもあるので、そこでちょっと自分と気の合いそうな人を見つけてみる、とか、そういう

方法は一つあるのかな、と思ったりもします。

はるな愛 : (Xジェンダーというのは) すごい一番難しい性のジャンルだと思うんですよ。やっぱり生きづらさとか、自分が「こういう自分なんだけどわかってくれるかな」、って言った時にその表現方法がないから、たぶんすごく難しいとは思うんです。でも、やっぱりそこを受け入れてもらうためには、いろんなところに出向いて出会うしかないとは思うんですよ。ぴったりはまる居場所って正直どこもないかもしれない。でも、ここだったら、なんかちょっと話をわかってくれた、とか、そこを大きく広げていくしかないと思うな。りりいさんなんかは？

りりい : そうですね。あの、話せることで自分で自分が何を悩んでいるかに気づくとか、そっか、自分はこういう性別でいきたかったんだ、とか、服装だけこういう性別だったら自分は楽になるんだ、とか、話すことで自分で気づくことも多いと思うので、そういう場所に行くということとか相談することはとても大切だと思います。

はるな愛 : そうだよな。話すことってほんと大きいですからね。

続いてご紹介するのは、精神障害のある方でセクシュアル・マイノリティーの方です。

英D : 「しゅんたろー」さん、20代、ゲイで、統合失調症の方からのメールです。

自分は、ゲイということで悩んでいる時期が長年ありました。ゲイであるということを家族に話せないで悶々としていた時は、本当に頭がおかしくなりそうでした。
統合失調症になったのは、21歳の時。錯乱状態になり、入院しました。医者に今までの事を全て話し、両親も同席していたので結果的にカミングアウトという形になりました。
病気で薬を飲み続けて2年くらいは、寝て食べて寝て食べて…というような感じでした。
情けなくて自殺を図り、母を泣かせたこともありました。
今は生活保護を受けてひとり暮らしをしています。経済的に自立したいと思うけれど、一般就労は難しいと感じてしまいます。

はるな愛 : ふーん、なんか自殺をはかる、っていう・・・親を泣かせるって・・・コジさんなんかも、気持ちわかります？

コジ : ああ、すごくよくわかります。私は、あの、中学生の時に「あいつレズや」みたいな感じでいじめられて、「レズビアンであってはダメ」ってはじめ思ってた、中学生の頃、思ってた。それがずっと高校の時まで続いていたんですけど、高校になってまた女の子に恋をしちゃって。で、ダメって思ってたから、その女の子を好きになった時は本当に、「本当にもうダメだ」って。「生きていられない自分だ」って思っちゃって。死んじゃおうと思って。でもまあ、ちょっと死ぬ前に新宿二丁目に行っところ、と思って行って・・・(笑)

はるな愛 : でもね、今の、そのことなのよ。私もそうなんです。死ぬ前に、「いや、私、だったら死ぬ前に自分のやりたいことしよう」っていうきっかけで、そこで居場所を見つけたと思うんですよ。

らぎ : 私は性別違和があるほうではないんですけど、自分の好きな対象が他の人と違うということで、なんか後ろ指さされたりとか。やっぱり、なんやろ、「ここにいたらあかん存在」というか、「世の中にいたらあかん存在や」、とってしまったりして。
それは、調査とかでも出ていて、トランス(ジェンダー)・・・性同一性障害の人だと岡山大学の中塚幹也(なかつか・みきや)先生が、調査を2008年に出しているんですけど、性同一性障害の人たちで「死にたい、と思う気持ちをもったことがある」という人が69%もいて。

はるな愛 : へえ・・・

らぎ : ね、高いですよ。で、実際に自殺未遂、自傷行為をしたっていう方が、20%っていうことになってますね。

英D : もう一つ、ご紹介したい調査があるんですけども、宝塚大学の日高庸晴（ひだか・やすはる）教授が、2001年に、大阪・ミナミのアメリカ村という若者が多く集まる場所で、およそ2千人を対象に行った調査では、ゲイやバイセクシュアル男性の自殺未遂リスクが、異性愛者のおよそ6倍にのぼる、という分析結果が出ているんです。

はるな愛 : ちょっと、りりいさん、すごく高くないですか？

りりい : そうですね。でもこういう数字を見る度に、何か性同一性障害の人とか、ゲイやバイセクシュアルの人たち、その人たちが死にやすい人たちみたいに思われるのがすごく悔しいことがあって。大切なのは、社会の方がその人たちを受け入れていない状況に、もっとこのデータを見て目を向けていくことが大切なのかな、っていうのをいつも思います。

英D : セクシュアル・マイノリティーの人たちが精神的につらい状況に追い込まれてしまう背景ですよ、そこが大事だと思うんですけども、長年、セクシュアル・マイノリティーの人たちのカウンセリングをされていて、精神科医でもある平田俊明（ひらた・としあき）さんに聞いてきましたので、その録音をお聞き下さい。



録音 平田俊明さんインタビュー

いろんなセクシュアルマイノリティーの人への偏見みたいなものが世間の中にあると思うんですけども、その偏見自体が社会にあるから生きにくいというのもあるんですけども、それと同時に、その偏見というのを自分の中に、本人が・・・当事者自身が内面化してしまっているということもあるんですね。

本人が生まれ育ってくる中で、いろんなセクシュアル・マイノリティーに対しての冗談やからかいの言葉だったり心ないような言動っていうのが子ども時代から、いろんな・・・学校でとか、親からとか、メディアとかからいろいろ流されていることとかがあると思うんですけども、そういうのを本人も・・・当事者と気づく前から、そういうことが流されているので、知らないうちにそういうセクシュアル・マイノリティーへのいろんなネガティブなイメージを本人が取り込んでしまっているということが起こったりすることがあると思います。その人の自尊感情、要は自分で自分を大事に思える感情っていうのが、やっぱり低くなっている人もいたりするんですね。で、それによって本人がすごく精神的にしんどくなりやすかったり、それだけ、たとえば「うつ」と言われる状態になりやすかったり、いろんな精神的な不調というのによりなりやすい、ということはあるんじゃないか、というのは、見ていて思うことがあります。

あとは、あまり将来に対して希望を描きにくいとか、将来に対して前向きなイメージを持ちにくい、という人もいるように思うんですけども、そういうこともあるんだろうと思いますね。

はるな愛 : この、「将来に対して希望を描きにくいとか」、っていう・・・気持ち、すごいわかるな。私も、当時を振り返ったら、「この先、どうやって社会で関わって生きていけるんだろう」、っていう、なんかちょっと先が真っ暗じゃないけど・・・」りりいさんなんか思いませんでした？ どうでした？

りりい : そうですね。私も、そういうモデルなかったんですね。私の場合は。あんまりそう綺麗になれると思っていなかったし。あの、だから、そういうモデルがない苦しみというのは、すごくお先真っ暗になってしまっていて、そこがつらいのかな、と思いますね。

英D : あとこの方、「ゲイであることを家族に話さなくて悶々としていた」、って書いていらっしゃるんですけども、やっぱりこういう、家族との関係っていうのも結構大きいんですかね？

りりい : そうですね。私も父親とは何年も話しはしていませんけども、あの、家族に自分のことを話せない、望みの性別のことを話せないというのはすごくつらいこともあるし、家族に理解されないことって、すごく家族って身近な存在だったりするので、そのつらさってというのは、ほんとに、「しゅんたろー」さんのことと私のこと重ねてしまうぐらい、つらいな、と思うんですけども。でも「しゅんたろー」さんのメールをみると、すごくなんか自分が悪いみたいな思いが伝わってきて・・・別に病気とかって自分の努力や根性で治るもんじゃないし、別にあの、自分のセクシュアリティとかはなおす必要もないものなので、自分のせいだってあまり思い込まないで、もっと相談できる相手とか・・・こうやってメール出してくれるっていうことがすごく大きな一歩になるのかなあ、と思いました。

はるな愛 : いや、ほんとそうですね。

英 D : で、もう1通ね、同じく精神障害があってセクシュアル・マイノリティーの方のメールをご紹介しますんですけども。

はるな愛 : 「みくと」さん、20代、統合失調症の方です。

俺の悩みは、性同一性障害のことです。毎日、苦しんでいます。今まで誰にも、親にも言えないままでした。
今年になってから、かかりつけの精神科の先生に相談しました。そしたら、「女から男になるのは大変です。男らしく生きていればいい」って言われました。それからなんにも解決ができないまま、生きているんです。
手術やホルモン治療を受けて、胸などってしまいたい。でもお金がかかるので受けられません。もう女で生きる意味がわからなくなって、「性が変わらないなら死んだ方がいい」とすごく悩んだこともあります。一人で悩んでいたら気が重くなり、ここに相談すれば楽になるかと思いました。はるな愛ちゃんは、男から女に変わるのに、悩みましたか？

はるな愛 : うーん・・・手術に関してですかね？私は逆に言うと、もう悩めなかったです。もうこれしかなかったの。前にこの番組でも言ったんですけども、男で生きるか、女で生きるか、ってすごい悩んだ、小学生の時に。で、それは、何かというと、自分のために生きるか、親のために生きるか。自分の人生か、親の人生か。って考えた時に、やっぱり、親の人生を選んで、親のために生きてほんとにやりたかったこと全部できなかったときに、私、もうすごい後悔すると思ったんですよ。それやったら、自分がしたいことをやってみて、それで親には申し訳ないかも知れないけど、あの、自分が楽しいこと、したいことをやってみる姿を元気で見せられたら、親はいつかはわかってくれる、と思って。その時は、すごくわかってくれなくて苦しめたかもしれないけどね。そういう道を選んだんです。それを小学校の時に考えたので。うーん・・・

英 D : みくとさんからのメールでですね、今まで誰にも言えなくて、しんどくてしんどくて、で、「この人なら」、っていうことで初めて言った相手が、かかりつけの精神科の先生だった、と。「この人ならわかってくれる」、とおっしゃったと思うんですけど、言ったら、「男らしく生きていればいい」って言われて、何も解決にならなかった、とおっしゃっているんですけども。これはどんなふうに・・・コジさんなんかは、体験から、どうですか？

コジ : 私は今まで何人か医者を変わっているんですけど、今かかっている医者には、一番はじめに「今、一緒に住んでいる人はいますか？」って聞かれて、「います」って言ったら、「彼氏？」って聞かれ

て、「いや、彼氏じゃないんです」って言ったら、「あ、彼女ね」っていわれて、で、それでこの医者やったらいける、と思って、ずっと通っています。

はるな愛：すごい。

コジ：自分の今、置かれている状況を話そうと思ったら、セクシュアリティのこと抜きにしては語れないと思うんです。ほんで、もちろんトランス(ジェンダー)の人やったら性別違和ですごくしんどい、というのもあるだろうし、医者に行ってまでちよいちよい嘘をつく必要はないと思うんですよね。

らぎ：その根幹にかかわることで、自分の状況を話す時に自分のセクシュアリティの話しをしないと治療がうまく進まないというのはあるかと思います。たとえば性別に悩んでいて、それでうつになってるんやったら、その性別の話しをせんと、やっぱりうつって改善しないところがあるかなあ、って思いますよね。

英D：でもまだまだ、やっぱり、精神科のお医者さんだったり、カウンセラーだったり、セクシュアル・マイノリティに対する正しい理解、受け止めが十分できているという感じじゃない、ということですよ。

らぎ：そうですね、残念ながら。私も精神科につとめているので心苦しいんですけど。やっぱり教育の課程でも、セクシュアリティについて、セクシュアル・マイノリティについての教育がないので、お医者さん自身とかカウンセラー自身もあんまり知らないというのもあるかと思いますね。だからこれからどんどん教育の中にも入れていってほしいなと思っています。

はるな愛：なんか現実、ね、やっぱり、まだまだ差別とか生きづらさはすごくあるので。

うーん・・・みんなも悩みました？どう？りりいさんとかも。

りりい：そうですね、私もすごく悩んで、女性らしくなるってどうしたら女性らしくなるの、ってわからなかったし、自分がどこまで何を女性らしさを表現したらいいのかとか、全然わからなくて、そこがすごく悩んだし、そう思いつつも、周りは男の子として扱ったりとか見たりするっていうのがすごく違和感を感じていて、もう、ほんとにどうしたらいいのかわからなくて。私の場合は、20代前半の時にトランスジェンダーの先輩に会って、「まずは服装を変えてみたら？」って言われて、服装を女性の服装にちょっとしてみたら、すごく気持ちが楽になって、一つステップをこえたな、っていうことがあって。それで女性ホルモン(治療)とかすると、もう一つステップを、みたいな感じで、ちょっとずつ自分の望みの性別で生きているような感覚になれたことが、すごく重要だったかなと思います。

はるな愛：私、でもね、正直、今の人たちにね、なんかその、ま、ほんとはね、すごい悩んでいるからね、女性から男性へ、っていう人も、「卵巣とっていろいろしたい、胸とって・・・」っていうかもしれないけれどもね、私ね、性別適合手術を受けて女性のからだを手に入れたら、なんか全部悩みが終わると思ってたんですよ。全部、いける、と。でもそうじゃなくて、そこからやっぱり人と関わっていく、っていう人間関係もある。それはみんなあるからね。そういう悩みがあったり、恋愛もぜんぶ大成功すると思ってたけど、うまくいかない、って。手術するので気は楽になったし、なんかすごい自分のもとの姿にはなれたけど、そこから始まるものって、みんなと一緒にまだまだあるんだと思ったから、「手術がすべてじゃない」って、手術してから思えたの。で、やっぱり手術したら、もちろん、ちょっと後遺症、全くないとは言わないし、100%女の子になれないんですよ。あの、まあ、みんなね、いいことを言う人も多いと思うけれども、やっぱり、のちに体に負担しているのもあると思うから、なんかもうちょっと・・・まあ、でも、やってみないとね、これはね。私もね、「やめといた方がいいよ」って言うんです、私はね。体、なるべくそのまま自分の気持ちだけ・・・。

ももっと世の中が変わればいいし、受け入れる人たちが、そういう人たちを受け入れる体制ができれば、そんな手術も要らないと思うし・・・と思うんですけど、やってみないと乗り越えられないこともあるから。そこをよく考えて。

りりい : 日本は手術をしなければ戸籍の性別を変えられないですけど、国際的には、望まないのなら性別適合手術をしなくても性別を変えられるという動きになってきているので、そういった手術をしなくてはいけない、というような思い込みにはならないようにできればいいかと思います。

はるな愛 : そうねえ。ほんと、相談ありがとうございます。なんかあったら、相談してください。

(♪インターミッション)

はるな愛 : はるな愛の「バリバラ R」、今日はみなさんからいただいたメールをもとに、セクシュアル・マイノリティをテーマにお届けしています。ここまでは、障害があってセクシュアル・マイノリティの方の悩み、しんどさを伝えてきましたけれども、新しい動きがあるんですね。

英 D : そうなんです。障害のある当事者の方たちによる様々なサポートの取り組みも始まっているんですね。たとえば、はるなさん、こちらをごらんください。

はるな愛 : はい、本です、これ。「ろう LGBT サポートブック」。

英 D : 「LGBT」、これは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、それぞれの頭文字をとって作られた言葉なんですけれども。

はるな愛 : LGBT。

英 D : はい。セクシュアル・マイノリティの方たちが、自分たちのことをポジティブに語る言葉として北米やヨーロッパで使われ始めて、最近では日本でもわりとよく使われている言葉なんです。この「ろう LGBT サポートブック」というのは、耳が聞こえない人たちでセクシュアル・マイノリティの人たちが中心になって制作したもので、今年の3月に発行されたんです。

はるな愛 : ね、あの、知らなかったんですけども、手話の中で、レズビアンという手話・・・小指をたてて肩に置くって・・・レズビアン、ってあるんですね

英 D : そうなんです。セクシュアル・マイノリティに関する手話の表現とか、ろうの LGBT の人たちのインタビューとか・・・

はるな愛 : 困っていることもありますよ。

英 D : そう、どんなことに困っているかとか、カミングアウトについての Q&A とか。

はるな愛 : へーえ、こんなことも書いてくれているんだ。

英 D : ろうのセクシュアル・マイノリティに関する情報がたくさん詰まった冊子なんです。

はるな愛 : ふーん、でも、こういうのができて嬉しい！私の時代にこういうのがあったら、もっとなんか情報があって、違った生き方してたかもな、って思うかも。

英 D : 中心になっているメンバーはですね、以前この番組のセクシュアル・マイノリティの回でも紹介した方で、ろうのご夫婦で、山本笑由美さんと諒（まこと）さん、諒さんは性同一性障害の方なんですけれども。

はるな愛 : でも、どうしてこのサポートブックをつくったんでしょうね。

英 D : 山本さんに聞いたところ、「当事者に情報を届けたい」という思いももちろんあったんですけど、ろうコミュニティーには差別的な手話表現とかが、けっこう何気なく多くのろう者や手話通訳者に使われているという現状があったり・・・

はるな愛 : そうなんだ。

英 D : そうなんです。で、たとえば、トランスジェンダーの場合は、病院や裁判所など様々な手続きが必要になってきた時に、専門的な内容を伝えられる手話通訳がね、今、少ないとか。そういう問題があって、そういうことを広く伝えていきたい、というふうにおっしゃっていました。あと、「デフ LGBT センター」というのをたちあげて、メールでの相談もやっていたりしゃったり、手話の場合、テレビ電話での相談も。

はるな愛 : ヘーエ。

英 D : 同じろうの仲間と出会いたいとか、カミングアウトに関する相談とか、もう、全国から相談が寄せられているそうなんです。

はるな愛 : もういよいよ世の中、すごい遅かったけど、いよいよ進んできたかと思えますよね。まだまだほんと、もう最初の一步も踏み出していないかもしれないけどね。コジさんも新たな取り組みを始めたそうですね。

コジ : はい。セクシュアル・マイノリティーだけの場に行く、精神障害がある人は浮いてしまうし、精神障害がある人だけの場に行く、セクシュアリティのことはちょっと言いづらくなったりするので、なので、「クォーク」では、「メンヘル」って言う名前でもセクシュアル・マイノリティー・・・LGBT など多様な性を生きる人で、なおかつ、精神障害がある人のための自助グループを始めました。

はるな愛 : ヘーエ、どんなことやっているんですか。

コジ : 毎週土曜日の11時半から12時半なんですけど、「言いつぱなし、聞きっぱなしのミーティング」といって、自分の思いを語る回とか、あと「ソーシャルスキルトレーニング」といって、コミュニケーションを練習する感じのゲームみたいなものなんですけど、そこで「カミングアウトをするならどうする？」みたいなトレーニングをしたりしています。

はるな愛 : え、らぎさん、こういう、ほかにもあるんですか？ 取り組みは。

らぎ : そうですね。発達障害でセクシュアル・マイノリティーの人の集まりとか、薬物依存とか、あとアルコール依存でセクシュアル・マイノリティーの人の集まりとか、そういったのがいろいろありますね。

はるな愛 : ヘーエ・・・当事者の活動も大事ですけども、公的な支援って、こう、ないんですかね？

らぎ : 去年の9月に、大阪市の淀川区が、行政としては全国で初めて「LGBT 支援宣言」っていうのをしたんですよ。

はるな愛 : えー！すごい、嬉しい。大阪市淀川区？

らぎ : そうですね。

はるな愛 : どういうことなんですか？ 具体的に。

らぎ : 7月から事業が始まっていて、LGBT 専用の電話相談っていうのを、月に8回ぐらいしていたりとか、あとは、コミュニティースペースっていうのを開放していて、誰でもこれる場所づくりっていうのをしています。で、コジがその担当をしているんですけども。

はるな愛 : あ、そうなんだ、コジさんが担当？ じゃあそこにいけばね、また新しい出会いもあるかもしれないですね。

コジ : そうですね、あの、第1回目は「セクシュアリティって何だろう？」っていうテーマで、ワークショップって言って、自分のセクシュアリティを考えることをそれぞれしたんですけど、あの、みんな自分のセクシュアリティを公表したくてたまらない、っていう感じになってました。

一同 : (笑)

はるな愛 : そうなんだ、「言える場所がやっとなった！」っていうことでしょうかね、たぶんね。これ、でも、全国からも電話がかかってくるし、来てもいいんですよ、みなさんがね。

らぎ : そうですね。

はるな愛 : でも、ほんというところ、もっと全国にこういう支援がやっぱり広がらないといけないと思いますから、聞いているみなさん、ぜひよろしくをお願いします。

・・・ということで、今日はですね、セクシュアル・マイノリティについて考えてきましたけども、みなさん、最後に一言ずつ、お願いします。じゃあ、らぎさんから。

らぎ : 悩んでいて絶望している時もあると思うんですけど、なんかこう、私も、いろんな人と会うことで、自分の生き方のロールモデルがなかったのがどんどん広がって行って、あ、将来があるんだ、って思えたので、人と出会っていくって言うのって、すごく必要なあと思っています。

はるな愛 : ふーん。コジさん、どうぞ。

コジ : 確かに今の自分にはそれがすごく苦しいことかもしれないけど、でもいつか、「これもあれもあったけど、でも（あったからこそ）今の自分があるんだ」、って思える時が来ると思うので、なんか・

はるな愛 : 今、幸せだということだもんね

コジ : うーん (笑) えっと、なんか、自由になれる時があると思うので、なので自殺をしようとしている人は一回、「メンヘル」にきてください。

はるな愛 : 「クオーク」の活動に。はい。りりいさん。

りりい : あの、今年の10月に、「セクシュアル・マイノリティの医療・福祉・教育を考える全国大会」が、大阪のドーンセンターで開催される予定です。ぜひ、興味があれば来て下さい。

はるな愛 : ね、悩んでいる方とかもね、ぜひ行ってもらいたいですね。

りりい : はい、ぜひ来てください。

はるな愛 : ね、これから、私もがんばっていきたくいし、この番組でもね、いろんな悩みを募集したいと思います。みなさん、今日はどうもありがとうございました。

一同 : ありがとうございました！

はるな愛 : シリーズ「セクシュアル・マイノリティ」。

来週もぜひみなさん、お楽しみになってください。

さて、はるな愛の「バリバラR」いかがでしたか。感想やメッセージをお待ちしています。

宛先は郵便番号540-8501。NHK大阪放送局、「バリバラ」の係です。

メールは、番組ホームページから送って頂けます。

ホームページのアドレスは、nhk.jp/ バリバラ、スペルはbaribaraです。

来週の「バリバラR」も、どうぞお楽しみに。はるな愛でした！バイバイ！